

読売新聞
広島総局

〒730
広島市中区上八丁堀
8-8

TEL 082-221-1111

広島本A

21世紀へ届け ヒロシマの夏

▶▶ 3

杏の実が赤く色付き始めていた。ウクライナの七月は涼しく、秋を思わせた。首都キエフの東、五百五十キロのポルタワ市。その子ども診療所で、貧血の治療を受ける子どもたちの不安げなまなざしに、山田寿美子(五三)は、二歳の時に原爆孤児となった自らの姿を重ね合わせた。

「原爆と原発事故。その放射能被害は変わらない」と、チェルノブイリ原発事故被災地の救援をしている市民団体「ジュノの会」(広島県府中市)が、山田と被爆者意識の研究を続ける広島大総合科学部教授の舟橋喜恵(六〇)の二人をウクライナに派遣した。相談活動を通じて知り合ったジュノの会代表、甲斐等(四六)の懇請だった。

広島市西区の福島生協病院で医療ソーシャルワーカーをしている。原爆で両親を失い、親せきに育てられた。孤児の精神的な支えにと結成された団体を通じて毎月二千万の援助も受けた。周囲の人たちに支えられた思いが強く、大学では社会福祉学を専攻した。

卒論で被爆者の実態を取り上げようと、同病院で聞き取り調査をしたのがきっかけで、この道を志した。医療ソーシャル

「チェルノブイリ」と連帯

原爆孤児だった自分重ね



元放射能除去作業員からの聞き取り調査(ウクライナで、山田寿美子さん提供)

たかったが十分ではなかった。「今後チェルノブイリとの交流のお役に立ちたい」と山田は願う。

◇ 「WHOの報告では、甲状腺がん以外は増えていないんだよ。つまり甲状腺以外には影響は出ていないということだ」

東京・港区のビル六階にある社団法人日本原子力産業会議事務局。副会長の森一久(五〇)は語気を強めた。

原発推進に携わる森は、被爆者である。京都帝大理学部 回生の夏休み、広島市内の実家に帰省中に被爆した。産婦人科医の父と母、軍医の兄を亡くし、自らも半年間、床に伏した。

◇ 大学では湯川秀樹博士の下で理論物理学を学び、同会議には五六年の設立と同時に入った。

十年後、茨城県東海村でわが国初の実用発電炉が運転を始め、それから三十年。国内には、模倣は続く。(敬称略)

五十一基の原発が稼働する。若いころ「被爆国が安易に原子力を利潤追求の種にするのはけしからん」と業界団体に抗議した森が、同会議の専務理事を十八年間務め、実務者のトップにまで上り詰めた。

「被爆国が原子力を進めるには、事故を決して起こさず、被害を与えないようにするのが一番大事」と、被爆者として「監視」する姿勢を貫いた。一昨年の同会議年次大会は古里の広島で開催した。平和利用は広島、長崎の犠牲の上に成り立っている。原爆の悲劇を知らずには語れない」との思いを伝えたかったからだ。「原子力推進の道に入ったのは運命としかいいようがない。いつもヒロシマで亡くなった家族を頭に思い浮かべ、仕事をしてきた」

◇

原発事故被害の救援と取り組む被爆者がいる一方で、原子力の平和利用に被爆者が取り組む。ヒロシマ、ナガサキの経験